陶淵明論——老残について

内田祐司

はじめに

老いるということは、わたしたちにとって重大な何事かであるに違いない。

確かにそうなのだが、若し〈老い〉が、単に生理的にのみやってきて、私たちを生理的な死へと追い込むだけだとしたらどうだろう。恐らく、そこには何ら問題とすべき意識された〈老い〉や、さらには私たちがこれから取りあげようとしている、一詩人によって生きられた劇（ドラマ）としての文学的な〈老い〉はあり得ない筈である。その辺の事情について、吉本隆明氏は次のように述べている。(1)

人間の〈老い〉は、そう簡単ではない。まったく個性的に、内面的に演ぜられる劇（ドラマ）が、この生理的な〈老い〉に伴奏される。もっと極端にいえば、生理的な〈老い〉のほうが伴奏で、ほんとうの〈老い〉は、個性的にひそやかに演じられる心的な劇（ドラマ）にあるといってよいのかもしれない。（中略）

それならば、人間はどうやって生理的な〈老い〉に、無理してたたかいを挑んでみたり、あるいは、わざと眼をつぶってそっぽをむいたり、あるいは自然にうけ入れたふりをしたり、また反抗し、またそれから諦らめ、また拒否し、といった内的な劇（ドラマ）を演ずることになるのか。この過程は、きわめて複雑であり、それとともに個性的なはずである。（圏点筆者）

そして、陶淵明の〈老い〉もその作品に徴してみると、個性的であるといえるための要件を十分に備えているようにみえる。

私たちはあらためて淵明の四十歳以後の諸作品に目を通すとき、この老詩人は〈老い〉について色々と悩み、これと向かい合うことで厖大なエネルギーを費していたことが、自然に感得されるはずである。

淵明が〈老い〉をはじめて自覚したのは、儒教的教養の影響下に

おいてであった。『論語』子罕篇に、「子曰く、後生畏るべし。焉んぞ来者の今に如かざるを知らんや。四十五十にして聞ゆることなきは、これ亦畏るるに足らざるのみ。」とあるが、淵明はこれを典拠として、

四十にして聞ゆるなきは、斯れ畏るるに足らず
我が名車に脂さし、我が名驥に策たん
千里遙かなりと雖も、孰か敢て至らざらんや
（「栄木」の詩）

と詠んでいる。〈老い〉をむかえようとしている淵明が、自己完成を目指して邁進しようとする決意のほどを述べたものである。がしかし、「名車」「名驥」「千里」等の華々しい言葉は、観念的に過ぎ、リアリティに欠ける。観念的であることは、それはそれで何事かである筈なのだが、今そのことを詳述している余裕はない。早く本題に移らねばならぬ。

一

一つの精神的主体が何らかの精神的負荷を有する場合、その精神的主体は、他者中に認められる自己と同質な部分に対し、鋭敏に反応することがある。これは私たちが少し反省してみれば、だれしも思いあたるにちがいない。

そして、わが淵明においては、〈老い〉あるいはそれに由来する変容を他者の中にも見出し、それらに対し嫌悪をもって反応している。そのことの証左となる言葉は彼の詩文中に少数ながら見られる。

たとえば、「歳暮、張常侍に和す」の詩で、

素顔光潤を歛め、白髪一に已に繁し

と、「おう己れの老いた容貌を認め、すぐに続けて、

闊なる哉秦穆の談、旅力豈に未だ愆はざらんや

と、秦の穆公を嘲笑している。この二句は『書経』秦誓篇に「番番たる良士、旅力既に愆ふも、我尚はくはこれを有たん」と見えるのを典拠としている。年老いて尚体力を保ちたいと願っている穆公に対する鋭い嫌悪を老詩人はこの二句に込めているのである。

かかる淵明の穆公への嫌悪は、淵明自らが気力や体力の衰えを奈何ともしがたく思っていたことに発しているのである。淵明じしん己れの衰えについて次のような言葉をはいている。

常に恐る大化尽きて、気力衰に及ばざらんことを
（「旧居に還る」の詩）

気力漸く衰損し、転た覚ゆ日に如かざるを
（「雑詩」其の五）

前者の「衰」とは、『礼記』王制篇に「五十にして始めて衰ふ」と見え、五十歳を意味している。つまり、「大化」＝寿命が尽きて、五十歳まで気力がもたないんじゃないかと淵明は心配しているのである。後者の二句も気力の衰えを憂えたものである。

嫌悪の言葉がもう一箇所指摘できる。「自ら祭る文」では、

外姻晨に来たり、良友宵に奔る
之を中野に葬り、以て其の魂を安んぜん
窅窅たる我が行、蕭蕭たる墓門

と、己れの野辺送りの風景を述べた直後に、

奢は宋臣を侈ぎたりとし、倹は王孫を笑ふ

と、歴史上の人物に批難を浴びせている。前者は『孔子家語』に見える話。宋国の家臣桓魋はせいたくな石棺をつくろうとしたが、三年経っても完成せずに、孔子に笑われたという。後者は、『漢書』巻六十七に見える話で、漢の楊王孫は子供への遺言に、「わしを裸で埋葬しろ。死体を袋に入れて地下七尺に降ろし、足の方から袋をひき抜いて裸でじかに土に触れるようにせよ。」と言い、子供はやむなく実行したという。従って、この二句は、死に臨んで埋葬のし方などいちいちこだわっている輩に対する嫌悪を表明したものである。とくに、「倹は王孫を笑ふ」の「笑ふ」は嘲笑の意であり、ここには淵明の邪気が感じられる。なぜなら、淵明じしん「畏れず道里の長きを、但だ畏る人の我を欺かんことを、万一意に合はずんば、永く世の笑嗤とならん」（「擬古」の詩其の六）と述べていることからも分るように、笑う行為にある種の批評性を与えているからである。

さて、先の「歳暮、張常侍に和す」の詩中の二句にしても、「自ら祭る文」中の二句にしても、唐突の感を免れない。それぞれ二句がなくても、何ら文脈上の不都合を来たすことがないばかりか、ない方がむしろすっきりする。

が、見地を少し変えて見れば、かかる箇所にこそ作者のより顕な本音が露呈しているとも考えられる。

このように鋭く突出した言葉は淵明の詩文中において、極めて少数である。がしかし、少数であることは、直ちにその類の言葉の比重の軽さにはつながらないだろう。福永光司氏は、淵明の「咄々、俗中の愚」（「飲酒」の詩其の六）とか「狂馳の子のただ百年の中にあるを学ばじ」（「擬古」の詩其の二）とかの現実社会に対しての「露骨な憎悪と侮蔑の表現」について興味深い見解を示しているが、それと全く同一のことが淵明の〈老い〉にまつわる激しい言葉についても妥当すると思われるので次に引用してみたい。(2)

このような憎悪と侮蔑の表現は、文字を借りた表現としては極めて稀にしか見られないものではあるが、それによって一そう複雑な彼の内面的世界の奔騰と頽落の起伏が覗かれる無気味な言葉である。

もっと言えば、淵明じしん、かかる類の言葉が詩の言葉としては相応しくないことを十分に承知していながらも、表現への衝動に負けてつい使ってしまったのではなかったのか、と私は考える。

淵明の文学は、総体的に平静な表現を基調としていることはだれしも認めることである。それらの間隙をぬうようにして発せられる突出した言葉は、しかし、淵明文学に厚みや奥行きを付与するもの

ではあっても、決して平静さに瑕をつける類いのものではないと思われる。

二

晩年の淵明は時として、デモーニッシュな気分におそわれることがあった。たとえば、「劉柴桑に和す」の詩に、

良辰奇懐に入り、杖を挈へて西廬に還る

という二句がある。ある日、淵明は不思議な気分を感じた。じっとして居れずに、昔住んでいたらしい西廬まで散歩したということが述べられている。この二句は、内なるデモーニッシュな気分を発見したときの言葉であるが、その実体が何であるかを自覚的に突きとめようとしたものではない。

しかるに、「九日閒居」の詩においては、そのデモーニッシュな気分を凝視し、対象化し、そして形象化することに成功しているといえる。次にその全体を掲げる。

余れ閒居して、重九の名を愛す。秋菊は園に盈つるに、而も醪を持するに由し靡し。空しく九華を服して、懐ひを言に寄す。（筆者注、以上は序である。）

世短く意常に多し、斯れ人久生を楽ふ

日月辰に依って至るに、俗を挙げて其の名を愛す

露は淒々として暄風息み、気は澈みて天象明らかなり

往燕遺影なく、来雁余声あり

酒は能く百慮を祛ひ、菊は解く頽齢を制す

如何んぞ蓬廬の士、空しく時運の傾くを視るや

塵爵虚しき罍を恥ぢ、寒華徒らに自ら栄ゆ

襟を斂めて独り閒かに謡へば、緬焉として深き情起こる

棲遅固より娯しみ多く、淹留豈に成る無からんや

この詩においても、詩人の最も主張せんとする所は、中国的伝統に違わず最後の四句にある。先の「劉柴桑に和す」の詩における「奇懐」は、この詩にあっては「深き情」である。「深き情」はデモーニッシュであるべく、「緬焉」――茫漠としている。次の句にある「娯しみ」は淵明にあっては特別の意味を与えられている言葉である。というのも「娯」は、「歓に値ふも復た娯しみ無く」（「雑詩」其の五）とか「自ら娯しむ」（「飲酒」の詩其の一。「五柳先生伝」）とかに典型的に表現されているごとく、淵明の内面的且つ主体的な、最も優れた境地を意味しているからである。くわえて「固より」という、淵明が意識的に使っている形容の言葉を伴っている。最後の句、「淹留豈に成る無からんや」は、「九日閒居」の詩における淵明の生きる姿をすぐれてよく表現しえている。反語法によって弾みを得たこの最後の一句は、淵明が早くも四十歳そこそこで「白首成る無し」（「栄木」の詩）と嘆息してみせ、「飲酒」の詩其の十六では「淹留遂に成る無し」と過去をふり返った挙句「終に以て吾が情を

翳らす」と落胆しきってみせ、「自ら祭る文」では「惟れ此の百年、夫の人之を愛しみ、彼の成る無きを懼れ、日を愒り時を惜しむ」などと世俗の営為を中傷するに至っているのを同時に思い合わせてみるとき、淵明にとっていささか特異な言葉であることが了解されるだろう。「成る無し」は淵明文学中の重要なモチーフの一つとして頻出する成語ではあるが、この「九日閑居」の詩のごとくに意志の直接性によって支えられた強い自負の念として表現されているものは他に例を見ないのである。

以上を要するに次のごとくなるだろう。酒もなく独り素面（しらふ）で謡っていると、得体の知れぬ感情におそわれた。その気分の中では、隠棲生活においてこそ最高の境地に達することができるようにみえる。こうして、ここにじっとしていても、この身において道は必ずや達成されるに違いない。（否、すでにもう達成されているのではなかろうか。）そしてそれら内面の昂揚は、「襟を斂めて独り閑かに謡」っているときに、ゆくりなく訪れて来るのである。

もう一例、「胡西曹に和し顧賊曹に示す」の詩の最後の、

逸想淹む可からず、猖狂独り長く悲しむ

のごとき二句も、「九日閑居」の詩と、趣は異なるにしても、老いてなお物ぐるおしさにとりつかれた淵明の姿が造形されているものと言える。

淵明は老いてますます内省的になり、絶えず自己の内面を凝視していたからこそ、かかる昂揚や胸騒ぎを即座にかつ主体的に受けとめ、言語の上に定着せしめることができたのである。

ここで一つだけ注意すべきは、デモーニッシュな気分の中でたまたま道の完成が夢想されたのではないということである。それはつねに詩人の心を潜在的に領しており、時にデモーニッシュなかたちで噴出していた――というのが正当な理解であろう。かかる淵明の姿は、隠逸者としての成功やそれによって得られるべき〈名声〉に対する彼の執念を彷彿させるものがある。

三

ある時期から、淵明はそれまで捧持してきた思想を捨ててしまう。もっと精確にいえば、淵明は、思想を持続することから降りようとする格好を読者に向って繰り返し見せようとする。その思想とは、具体的には「固窮の節」という言葉によって最もよく表現される隠逸の思想である。同時に淵明は、隠逸生活つまり「固窮の節」によって獲得されるべき〈名声〉をも断念しようとしたのである。淵明の詩文の制作年代は晩年の諸作にあっては殆んど確定されていないため、いつ頃からこの思想に訣別したか明確にできないが、死の直前の作である「挽歌の詩」や「自ら祭る文」に最もよくかかる事柄が表現されているのをみると、最晩年になってからのことであると一おう言えるだろう。次にその例をいくつか掲げる。

①嗟我独り邁き、曾ち是れ茲れに異なれり

寵は己れが栄に非ず、涅(くろ)むとも豈に吾緇(くろ)くせんや

（中略）

前誉を貴ぶに匪(あら)ずんば、孰か後歌を重んぜん

（「自ら祭る文」）

②千秋万歳の後、誰か栄と辱とを知らんや

（「挽歌の詩」其の一）

③我が身に貴ぶ所以は、豈に一生に在らずや

一生復た能く幾ばくぞ、倏(すみやか)なること流電の驚くが如し

鼎鼎たり百年の内、此を持して何をか成さんと欲する

（「飲酒」の詩其の三）

④身後の名を留むと雖も、一生亦た枯槁す

死し去りて何の知る所ぞ、心に称ふを固より好しと為す

（「飲酒」の詩其の十一）

以上四例のうち、①「自ら祭る文」と②「挽歌の詩」其の一、は題名からして死に関連しており、後の③④も死を意識しての言葉である。

最晩年に至り死をつよく意識しはじめた淵明の思想的変化について、山田英雄氏は以下のように述べている。(3)

すなわち、淵明はそれまでの己れの隠逸者としての生き方、及びそれによって得られるはずの名声を追求するという風な「生き方の破綻、座礁を、達観の超論理によって克服せんとする発想」を持つようになった、と。そして、じつは、「名声に対する達観は一種のポーズであり、名声への期待を現実に断念せざるを得ぬと観念されたとき、それ（＝名声欲、筆者注）を達観のポーズを取ることによって、辛くも変形して保持しているのだと解される。」のである。

「達観のポーズ」とは、この節の最初に述べた思想を持続することから降りようとする格好のことと殆んど同じ意であると考えてよい。思想や名声を断念したということのあらましは以上のごとくに考えて大かた正しいと思われる。

がしかし、その裏ではかなり複雑な葛藤の劇(ドラマ)が演じられていたのではなかったか、と私は考えるのである。というのも、淵明があれほど執拗に「達観のポーズ」をとったことについて、必ず淵明の内面にしかるべき理由を見出し得ると思えてならないからである。

その理由とは何か？

淵明は「自ら祭る文」において、前掲①のいわゆる「達観のポーズ」の直前に次のような六句を置いている。

惟れ此の百年、夫の人之を愛しみ

彼の成る無きを懼れ、日を愒(むさぼ)り時を惜しむ

存しては世の珍と為り、没しても亦思ばれんとす

巷間の人々が百年ばかりの生に執着し、例の道の完成しないのを恐れ、生き急ぎ、死んでも世間に尊重されたいと願っているような体たらくを嗤っているのである。中でも注目すべきは三句目中の「彼の」である。「彼の」は表現としていかなる価値を有するのか？「彼の」によって修飾されている「成る無き」とは、すでに述べた

ごとく、じつに淵明じしんが〈老い〉を自覚しはじめたときから「懼れ」の対象としてきたところのものである。それを今は他者の中へ投影しているのである。つづく「日を惜り時を惜しむ」においても、淵明は過去における自らの生への愛着、現実主義を今はの際に他者の中に映し出しているのである。そしてその現世主義こそ淵明が執心していたものである。それは例えば「斜川に游ぶ」の詩の中で次のごとく時間を惜しんで行楽をなさんとしていることから判る。

歳開けて倏ち五日、吾が生行くゆく帰休せんとす
之を念へば中懐を動がし、辰に及んで茲の游を為す
（中略）
且つは今朝の楽しみを極めよ、明日は求むる所に非ず

また、次の「雑詩」其の一、

盛年重ねては来たらず、一日再び晨なり難し
時に及んで当に勉励すべし、歳月人を待たず

も、人口に膾炙している詩であるが、「斜川に游ぶ」と同様に現世主義・享楽主義の詩である。わが国では従来やや教訓的なものとして理解されている嫌いがあるが、原義はこの四句の直前に位置する「斗酒もて比隣を聚めん」によって分るように、現実を享楽しようとする意志なのである。

これらの淵明じしんの現世主義と、「日を惜り時を惜しむ」のごとく他者を揶揄するのとを較べてみるとき、私たちは淵明の内面の変化をまざまざと見せつけられる思いがする。「自ら祭る文」引用部の最後二句「存しては世の珍と為り、没しても亦思われんとす」にしても、「飲酒」の詩其の二で「固窮の節に頼らずんば、百世に誰をか伝ふべき」と名声獲得の為に決意をあらたにしている求道者の姿と突き合わせてみるとき、両者間の齟齬にはたんなる矛盾以上のものが感じとられるのである。

淵明がこれらの矛盾をむしろ意図的におかしていることは、「彼の」というごとき過去の己れの生き様を疎外し、対象化している言葉によって明確なことなのである。加うるに、「彼の」に続く三つの事柄は、ともに淵明がそれまで信奉し生活の指針としてきたものであった。それらは道の完成であり、現世主義・享楽主義であり、名声の追求である。この組み合わせも明らかに淵明の意図に由来するものと思われる。

ではなぜ淵明はあえてかかる矛盾をおかしたのか？　それは恐らく矛盾をおかさねばならないほどに彼の生きる姿勢が変ってしまったからであろう。当然と思われるかも知れないがそうとしか答えようがないのである。彼は自己の変容を書かないですますこともできたはずである。が、彼は矛盾を承知のうえで表現した。私たちはそこに彼の詩人としての誠実とともに、表現者の執念を見ることができる。

〈老い〉や死の自覚によって起こる矛盾は、淵明にとって個人的な現実であるに違いないが、それはまた人間性の真実に根ざしているために、そのまま普遍性をも有する。私たちが淵明の矛盾を目に

したときに粛然とせざるを得ないのも、矛盾のもつ普遍性が私たちに迫ってくるからであろう。

以上を要するに、晩年の淵明は思想を拒否し、その拒否は表現としては「達観のポーズ」としてあらわれた。そして畢竟、淵明の本音は、思想や名声にとり憑かれた自己の過去を清算しようとする衝動にあったと考えられるのである。

かかる「達観のポーズ」の執拗さは、淵明の己れの過去に対する慙愧の念の深さと見合っていると考えられる。淵明が己れの中途半端な過去の生活に対して恥じ入っている様は、五人の子供たちへの遺言形式の文「子の儼等に与ふる疏」にすでによく表現されているところである。(4)

さて、「達観のポーズ」とはそもそも何なのか。詩人の創作現場では、それはいったいどういうしくみで存在しているのか。「達観」であれ何であれ、「ポーズ」が「ポーズ」として成立するためには、そのポーズをつくろうとする主体が表現のおもてにせり出してきて、言わんとすることを読み手に対してこれ見よがしに演じて見せなければならないのである。飽くまで詩人自身の肉声として発せられた言葉によらねばならないのである。事柄自身に語らせることを「ポーズ」とは呼ばないからである。「豈に……」「何をか……」「誰か……」等の反語的な修辞法――思想表明の言葉としては余りに型にはまった原始的な方法――を必ず用いているのもその「達観のポーズ」を成立せしめんがためだったのである。

注

(1) 吉本隆明「斎藤茂吉論――老残について」(『現代短歌大系』第一巻解説、三一書房、一九七二年十月)

(2) 福永光司「陶淵明の『眞』について」(『東方学報』第三十三冊、一九六三年)

(3) 山田英雄「陶淵明における名声の追求」(『高知大国語教育』第二十四号、一九七六年十二月)

(4) 茂木信之「陶淵明序論」(『東方学報』第五十一冊、一九七九年)に詳しい。

陶淵明の詩文の訓読については、一海知義氏の訳業に負う所甚大であった。記して感謝したい。

(付記) 尚、この小論は筆者の卒業論文から、副題「老残について」に見合うように抄出し、加筆、訂正したものである。

(愛知県立刈谷北高等学校教諭)